

5
4
3
2
1
0
80
90
70
60
50
40
30
20
10
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10

紀伊國名所圖會

三之卷上

名草郡



門王

紀伊國名所圖會卷三目錄

月鹿の製
雄のム
なづら雪原
紀の園詠
抵園寺
力侍神社
楠奉社
八王子社
總社明神
星頭神社
高良神社
淨光寺
齒觀音堂
田原齋森氏宅
川邊王子
八幡社
大屋都寶社
府中神社
十五社明神社
中村王子社
山口驛舍
法珍寺
山口驛舍
小安寺
土屋神社
八王子社
午頭天王社
永山寺
水德中小を美図
聖樹御左室四名
松損寺
復元堂
云法寺
天心神社

天理圖書庫



丹生神社
草薙寺
千壽院
安人山處
直川助走四名
修也大神社
園部神社
作乃隱山墓
佐吉社
總社明神
二王門
日昇宮七瀨坂
藏法藏
役行公石塔
桜井
一樂寺
園明院寺
南嶽山丈同寺
九頭神社
赤財主社
明光寺
谷引
菖蒲井
八王子社
藏王權現社
南嶽山丈同寺
日吉山王社
圓明院寺
羽衣凌雲
天台大師像
伊久姬社
三上之

砂糖

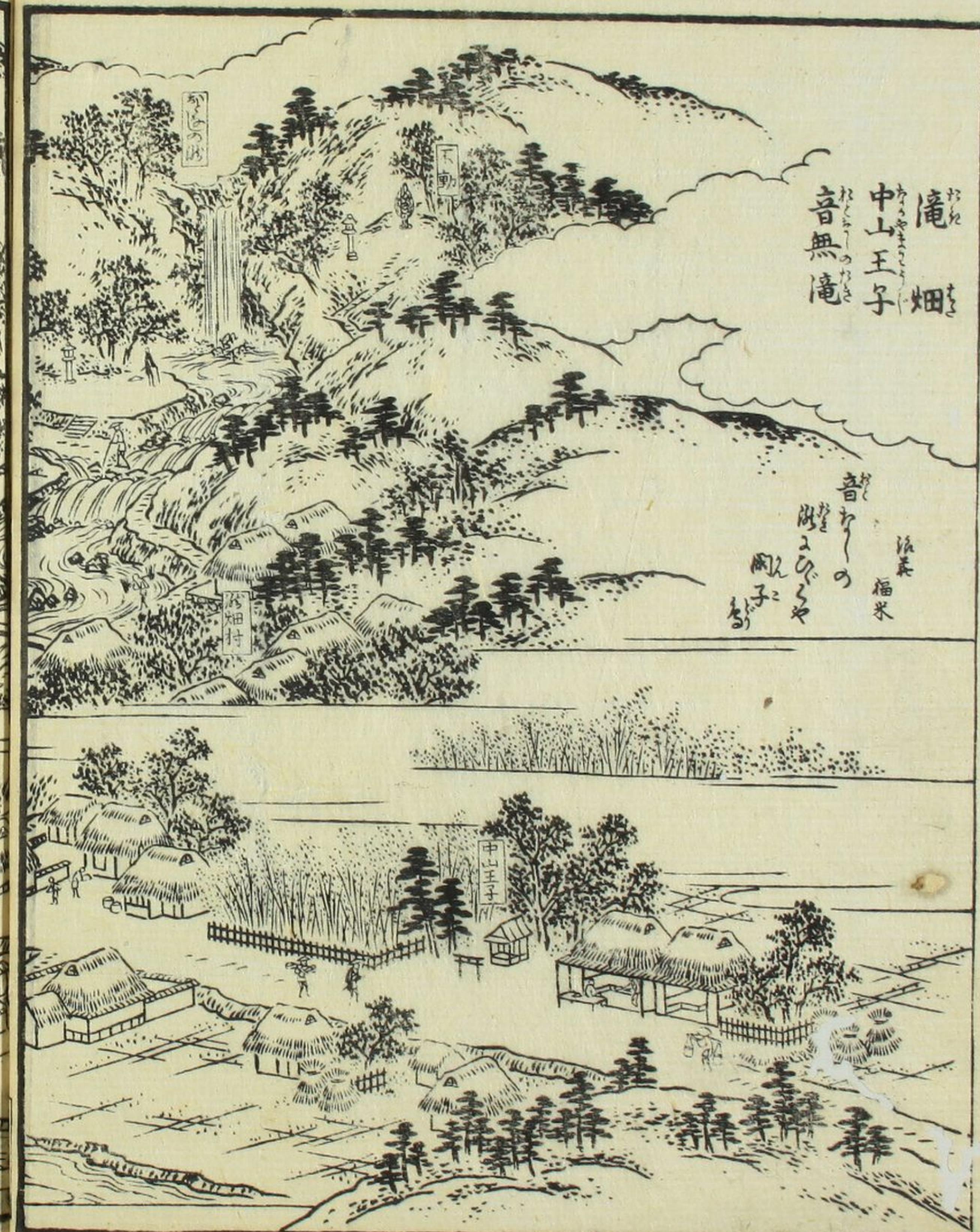
唐以前まだ支那へ渡るものもあつて、大正時代からて
外國より献上され、其法をもつて始くこれが藝なる
に先づ龜山記が見えて、古東方生皆是あるべきだ
當府城の五十九ヶ所、難骨堂内とつまみ難骨堂裏の所は、
藝法にはてて、西國在田郡小豆之村のうち
難骨堂と云ふ田畠が甘藷と芋をもつて栽培せらるや

國君うる國あくち其のあがむを諸
國ふ契ふとひかのま
連鎖はがはくうひてらまたかや定國益を助ける
のゆ廣大あらとつゞく

山王子社 山莊の畠村は在小河
梅よんて松原と通れか十角の王子と称するも
或へ修禊と云ふも或へを御とほなま下の松原にて其を甘くすよ臨でたるやうの神宇の
ことをあり是を玉子と称する由來院院の御子ふ唐人をもうての名なり。○定

家即ち御所に造河記を建仁元年十月八日拂曉去る赤坂達一と頼王子又於後中被次參地
藏堂王字次參宇北園王子也。○平家也。盛慈院の餘ふを承る。○家也。盛慈院の餘ふを承る。
と記存の事の多くなるとの中。○そあ。○げあ。馬よ。○かく。老よ。○と。○そ。○て。○り。○よ。○んで。○出。○朱。○シ。○う。○と。
同村南のと。○ち。○げ。○ん。○と。○み。○う。○水。○源。○れ。○雄。○の。○よ。○う。○出。○く。○涼。○く。○た。○り。○川。○あ。○其。
三面谷。○あ。○う。○水。○源。○れ。○雄。○の。○よ。○う。○出。○く。○涼。○く。○た。○り。○川。○あ。○其。
其が。○と。○も。○う。○泉。○の。○く。○も。○と。○あ。○ひ。○う。○か。○つ。○よ。○森。○樹。○皆。○叢。○比。
て。○頗。○逃。○塗。○の。○貴。○あ。○う。○ひ。○あ。○早。○歲。○と。○ど。○も。○枯。○渴。○と。○あ。○苦。○渇。○不。
済。○を。○あ。○て。○冰。○常。○に。○溢。○そ。○う。
ふ。○よ。○り。○奉。○ま。○の。○山。○あ。○だ。○み。○よ。○雄。○山。○あ。○と。○び。○は。○底。○と。○と。○り。○く。○世。○古。○象。○の。○森。○隱。○住。○出。○く。○の。○波。○と。○お。○よ。○て。○有。○る。○事。○
ユ。○滌。○激。○と。○其。○山。○あ。○と。○び。○は。○底。○と。○と。○り。○く。○世。○古。○象。○の。○森。○隱。○住。○出。○く。○の。○波。○と。○お。○よ。○て。○有。○る。○事。○
い。○戻。○ん。○や。○と。○燒。○え。○の。○人。○と。○も。○故。○人。○織。○密。○の。○も。○又。○後。○あ。○う。○と。○人。○と。○う。○な。○れ。○を。○織。○
山。○城。○の。○金。○太。○原。○郷。○の。○所。○の。○隠。○あ。○と。○も。○遇。○そ。○の。○名。○宿。○ア。○う。○も。○の。○ふ。○緑。○の。○森。○野。○戰。○ろ。○所。○あ。○と。○

雄を
のふ
清々納言枕草紙よしわらしにたきへ
遊ゆりゆかゆと山やまはの遊ゆかゆ
雄ゆの山やまととう
○ 日奉後紀ひわらごき云植武天皇うえむらこうニニ年十
月よ章紀あき往ゆ國くにみ出で宣のぶ云い甲ちやく寅とねり自じ雄ゆ山やま道みち還もど日根ひね行あん宮ぐう云い峯やま
中記ちゅうき云い嘆歌たんか隣たが下げ
麻多輪まのわ嘆歌たんか隨さ下げ





紀の國趾

の國趾 又白鳥の
壯陽薬

奥と
ほんと
は
趾
又白鳥の歌もつうむ泉の玉より通玉へるる雄の山れありて南の麓
山陽を谷より東一所其下よしに園字の子孫と称する民家あり園へ
内く孝心大に二年閨塞防人と稱とある其處より是へ今後上卷
あやか吹上卷
あつドの君姫のんはいあきのわすめのうもうちとこそりてゑんぢくうなまくう。國のか
そくからあけの姫ちうもうしてなまかたまく。しまともひきあてこまあそびじく
ぞくくわらたりどもすきて。さうのまくしてづぞきく。あくうのむことももことじなと
つまくあらまやそひきりづく。やうとあふごうのふくもこきはく称て。ゆあむじて
まもひつまうのまう。まとちまくよこうじでく。すみたをもこれれきくちあかく。どうと
ねのうはくわてびそたらく。そんせんとまのうくわくまうけしたまうり。
もひたらよらむのわ
りすわらたり。うけの女のよせとくわらのほゑどもたくたくして。
きぬひ川をくよみつてたくまく。御ととよくうのわすめのうたまう
なましとまろとくふくわらとあんこまよまく

名代へちふるとも見え都あるこゑをうかくもくじにゆくと
へとくこえうらわと都鳥只のこゑくふまくうれしけ
ゆきまつたあひてかみよりも寝かねそむきにわく

あすの君
りんのこゑもとくわぬまゆへそ
とぞうむろくひよもれたり耶
あさる波のりのむかせ
ゆのや

さうしておのづかに保ひてゐるもあつた。おもうや
なくねよがーとふと、おなづかられて、まめのくら
いのうがつゆやのうへたまへとまへ

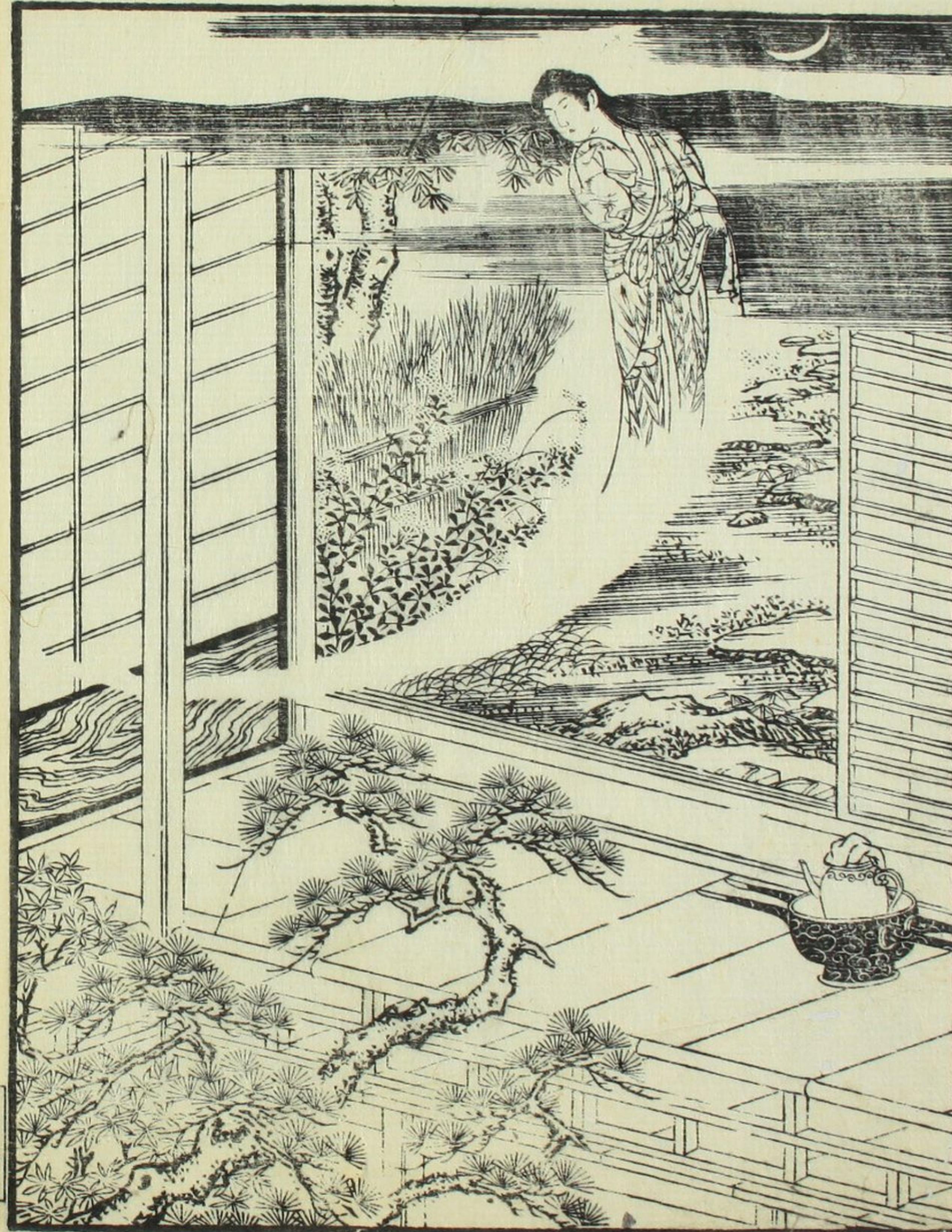
○袖中抄よみたはうちとく絶傳文の廻古近を考るんらのまほりをよみむ
きよひよみのやま
もとと紀伊の主雄山の口に守が持てらなうもどりへよみ

○今昔物語より全文のむ
紀伊王はむろ男ありその妻
有りぬるゝわが身はまことに
あくをしらうありは

経てはあやかれて日暮れへ根がまくとも空すら少しも
餘りの後がまだ日が下りて世がまくらぬとまづからずふあれひし
よと見ゆる事あらぬ男の妻に強きそよぎん妻になくて日暮れたりまろ

引張りの上より安らぎとてハサフコヤトサシヒテ毒
氣もと待ともひまえりを支えぬ所しもちうかく
たゞかひゆきてはくともかのめにれとおもとがま

あくとんと金かんとあくとんと其うにうか向た鳥と鳴くとひ生と角とに
てゆけば内々あくとくれもして泣よをき被ふる草那よつてをくわく
の女よううりへくら内々あくとくそたまのあくあくすれととをつひとすろと
○東よ風柳とすあういに下り弓の矢を中ころ射の箭とつづら原へ大轍の
えはははははははははははははははははははははははははははははははははははは
兵馬が未よして大轍の轍とつづら原へたまふの轍轍空よおひよおひよお
て御行くと主吏よゑやなめ地軟ふの弓背引る事一錢よもと絶刃引と集轍と
がりまくらのあくとあく山村よ木村にまくら弓箭のまくらとまくらされ又



あらた家こそ由緒あるものありまことにわがの國を川下りて河内へ出でるのと
のえんわすむじくばくばく

万葉

吉指子之跡履求追去者本乃閨守候留鷺

支本

おもつゝなりもひうねりひ紀の川上の自らりの宮

玉作

こうかくす東のうの白鳥と絶の川ゆきりゑの日は

家集

あしゆきの閨守よみりむらむらやすくあん

長秋浦藻

引くもよ紀の閨守うなづう春のみつれどくらやうすや

壬二

引くもよ紀の閨守うなづう春のみつれどくらやうすや

宝守の紙子すひだらた川うゆく

其

御

御

御

御

御

御

御

御

御

御

御

御

御

御

御

御

其

角

金 村

鳴 長 明

俊 賴

藤原光經

俊 成

家 隆

其 角

白鳥神社

白鳥山小野寺

白鳥山王子

白鳥山小野寺

山口

什賓小野塔源小町の本像

小町自筆の短冊

山口莊產神社

山口莊產神社

山口莊產神社



朝日さんを御宿とて門徒とぞげり。又太鳥又供養をねどりまつて朝幣清とぞれ。か家
事多ゆよとて又亮考に燒きあらばと是もうの供養と陳よ家つるを別天變へた。いは家へ民
衆の多くとも此家へ來て御禮懇くとて紳士の後悔すもも歎く。心あり。やひよ
うのとてとあれとを生者天正年中大太納言秀吉長門より御糸と寄せられ
よ。先主立派ゆる家よ。田園をまつてからとぞ當代よとぞ
國組君侍可附の田園三井子あり

惠雲山法龍寺

立像長ニロヘ化
はせひやうきにば
尊

妙樂山祇園禪寺

卷之三

おおやまの
おおやまの

○
奉尊桑師
わんぐんやくし
如來
ゆうらい

二、正傳の本源は、
檀今のもの像と
通じる。

卷之三

二、正傳の本源は、
檀今のもの像と
通じる。

に安置せしもの奉るゝ事無くもあつて、御先の是も像文
生音後鳥羽院在御御幸の御吐前のおまみを雪夢と感
りたまひ隨喜のあまうれ粉室の封入をうちとすを勅願ちと
空めたるとしてさへきたたゞを寺門あらへも
其後星霜の詠く兵火のあふ焼亡也。が幸き桑麻附か
來のとけ廻子よ入らせたまへて燐の中をあまうはく

一を寺僧本へた。焼失。まひとみわく。後ひそはく
見びく。まきつ。あじて安。まきどりとも
立候。御子の御子。御子の御子。御子の御子。
考へ。御子の御子。中村九郎。後年。上洛ちの奉公と傳。今よ建久の頃。東に都
立候。御子の御子。御子の御子。御子の御子。

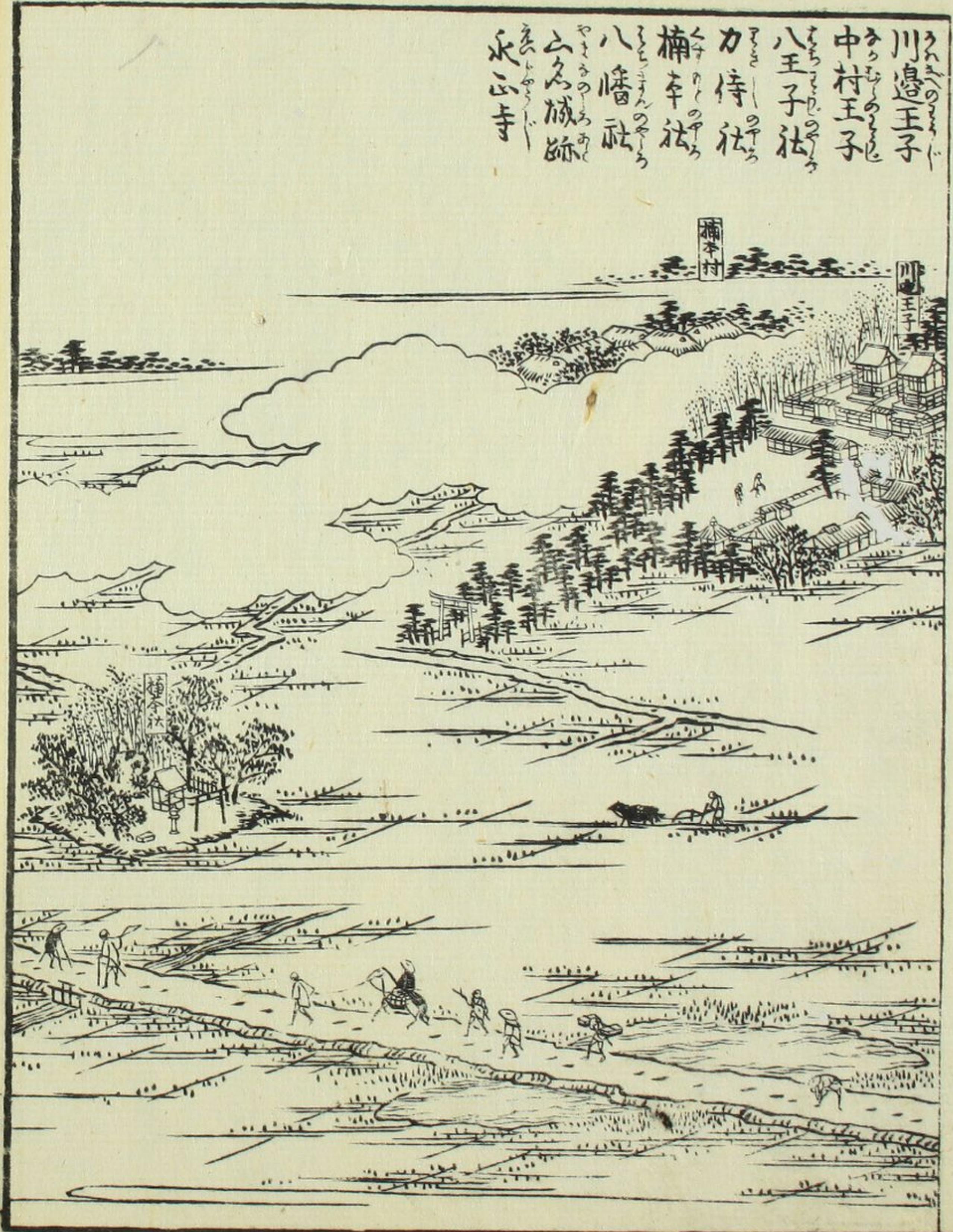
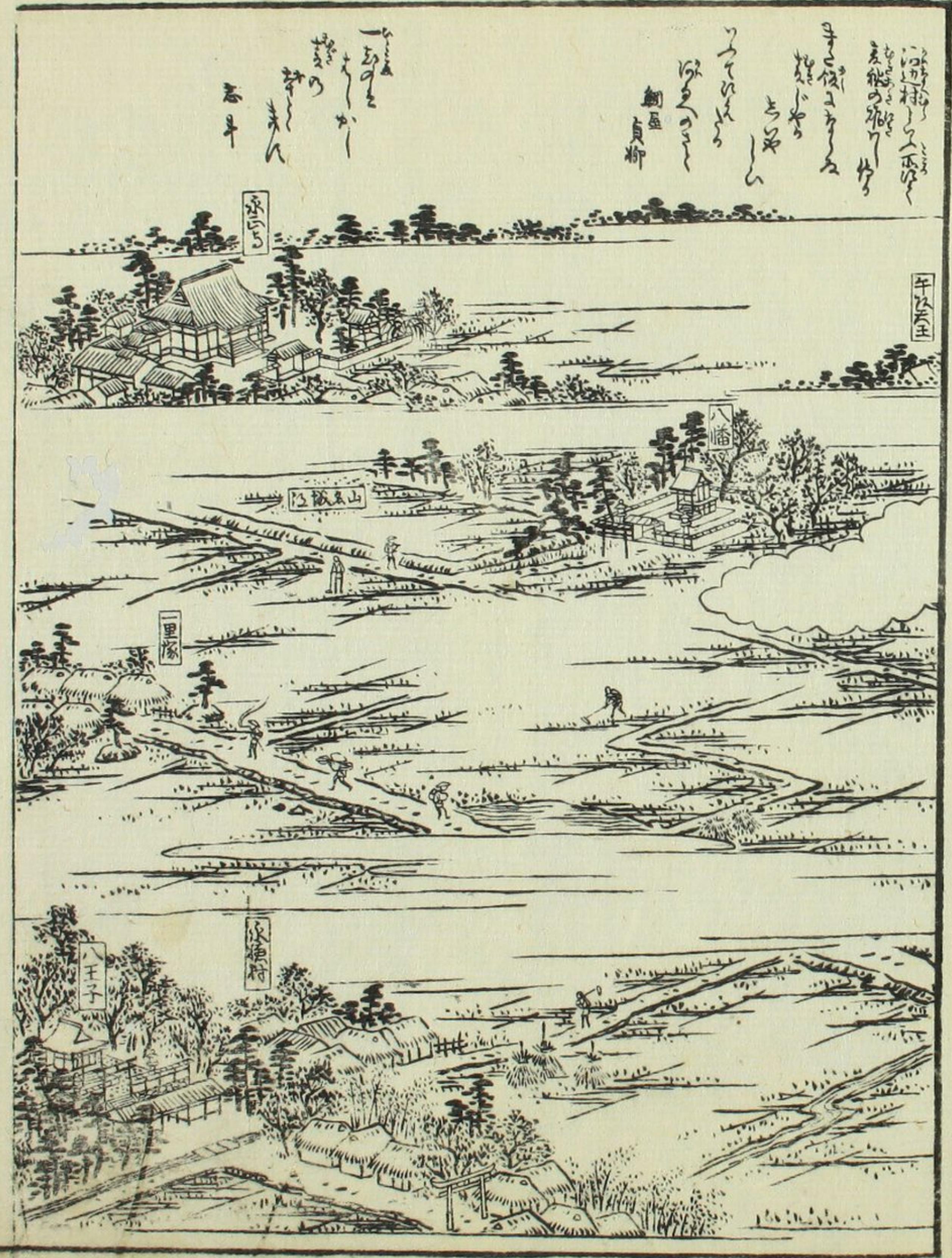
道を以て是よりして水と和らぐがて極武天皇の御宇延暦四年十一月田磨に宿泊の姓瓜なす人等
内藏平田大藏文彌支那宿民佐口姓是る者田曾の息田村治軍にて家母の室山川源
し越境ても終とまらずと云ふの是れゆゑこの感應すれども以て極武天皇御跡御集ニ御幸の
とあて田村磨ニ令下す是れの三事不とく一而の御事とてあるへく御室たゞは子也とて我
采色の上のあるとてうき院とてうに候宜され方ち御室御事御事御事御事御事御事御事
をののとくニ像とまよへ是れを安むとすとすとすとすとすとすとすとすとすとすとすとすと
の某所を本居にて御トモセひ御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
あれ今朝まで御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御
御御御御御御御御
御御御御御御
御御御御御
御御御御
御御御
御御
御
御

伏見院那宮常守 法名江月常照院日觀書判

山口驛舎
八王皇子社
中村王子社
川口王子社
中村二郎右衛門
楠本神社
○祭り神樟日令

内藏平田大藏文彌支那宿民佐口姓是る者田曾の息田村治軍にて家母の室山川源
し越境ても終とまらずと云ふの是れゆゑこの感應すれども以て極武天皇御跡御集ニ御幸の
とあて田村磨ニ令下す是れの三事不とく一而の御事とてあるへく御室たゞは子也とて我
采色の上のあるとてうき院とてうに候宜され方ち御室御事御事御事御事御事御事御事
をののとくニ像とまよへ是れを安むとすとすとすとすとすとすとすとすとすとすとすとすと
の某所を本居にて御トモセひ御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
あれ今朝まで御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御
御御御
御
御

無石



二
七

卷之三

此地小大
を退治す

セシウムヒトニ其の死死本と伐倒セ
シウムヒトニ其の死死本と伐倒セ

王正示
祭文和禮、ノ將軍
九月十九日おされあ
八幡宮
内村小き
にあり○
従旨基督教大師根來草創の初まほの内より法社と勤め
初の入官よりとて後山名徳院をま義理墨地の信守とん

山名徳理ち夫義理墨跡
に下が西よ是より西南へ惶の江ありと宝永年中墾田と
に二十八年松嶺と云ふ地昔の發揚えどや東洋へ大津城跡の余下
永穂中小さま散位藤原鷲之の末葉
當村の考家とあり公判き署の士の一

卷之三

近き少々坐と所の大社の神戸なり神名佐神名火神名見など書せり日本
便別祭八十萬群神仍定天社岡社及神地神戸内垂仁帝而卷首故弓矢及

大屋者
又
祭
申三座

延喜式神名帳云大屋都比賣神社例仲大月次本國神名帳云

孤達山
曾大屋
都比賣
拵

（神）

十五社の社

卷之三

支和御前社小野村東一
余より

おへそをくわへて
の御妹神よほへて兄命と同じ

卷八

まよひて大八洲國中
アハヤ
ムノ

卷之三

大屋御名ハ肩

くまのそん
えやた

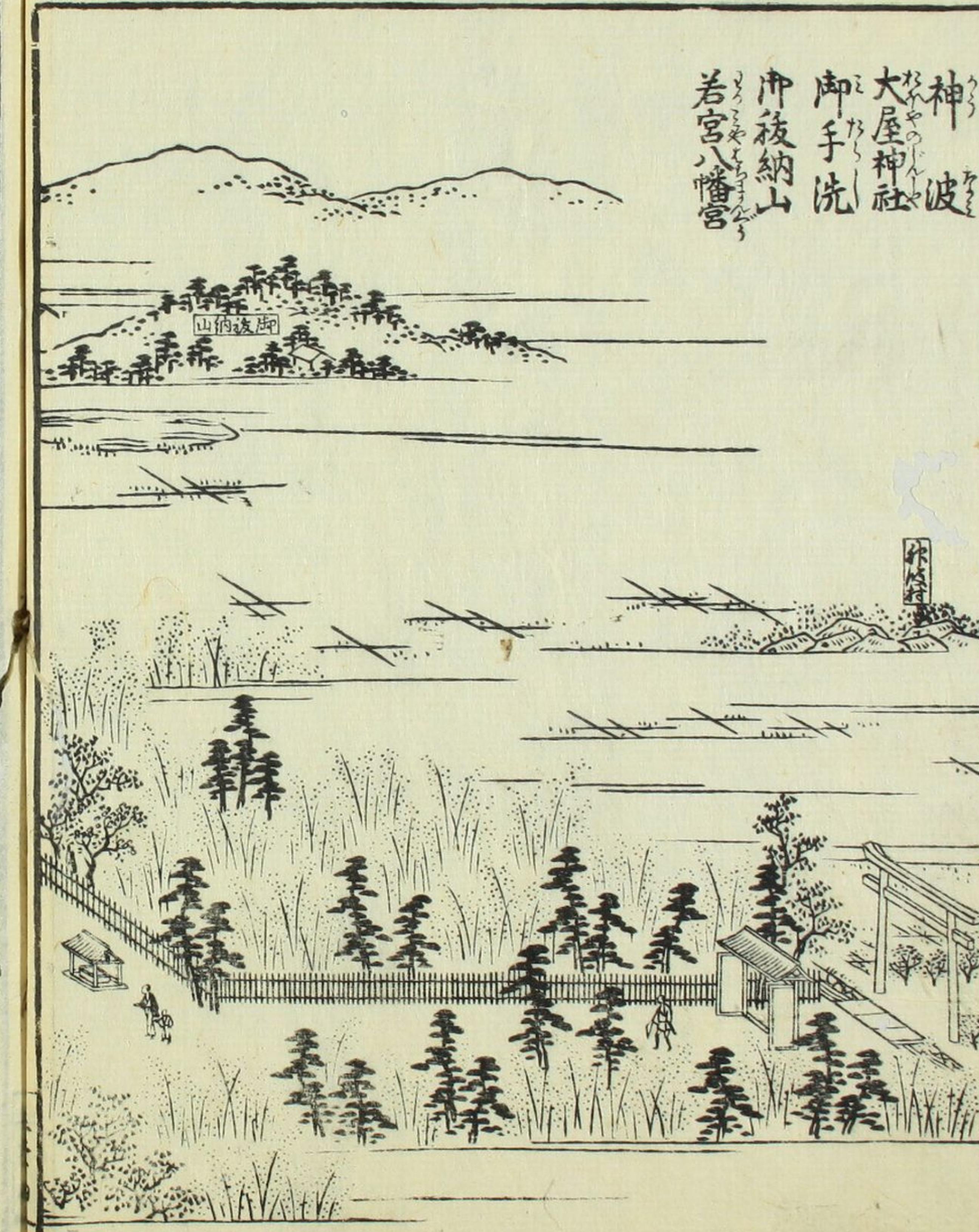
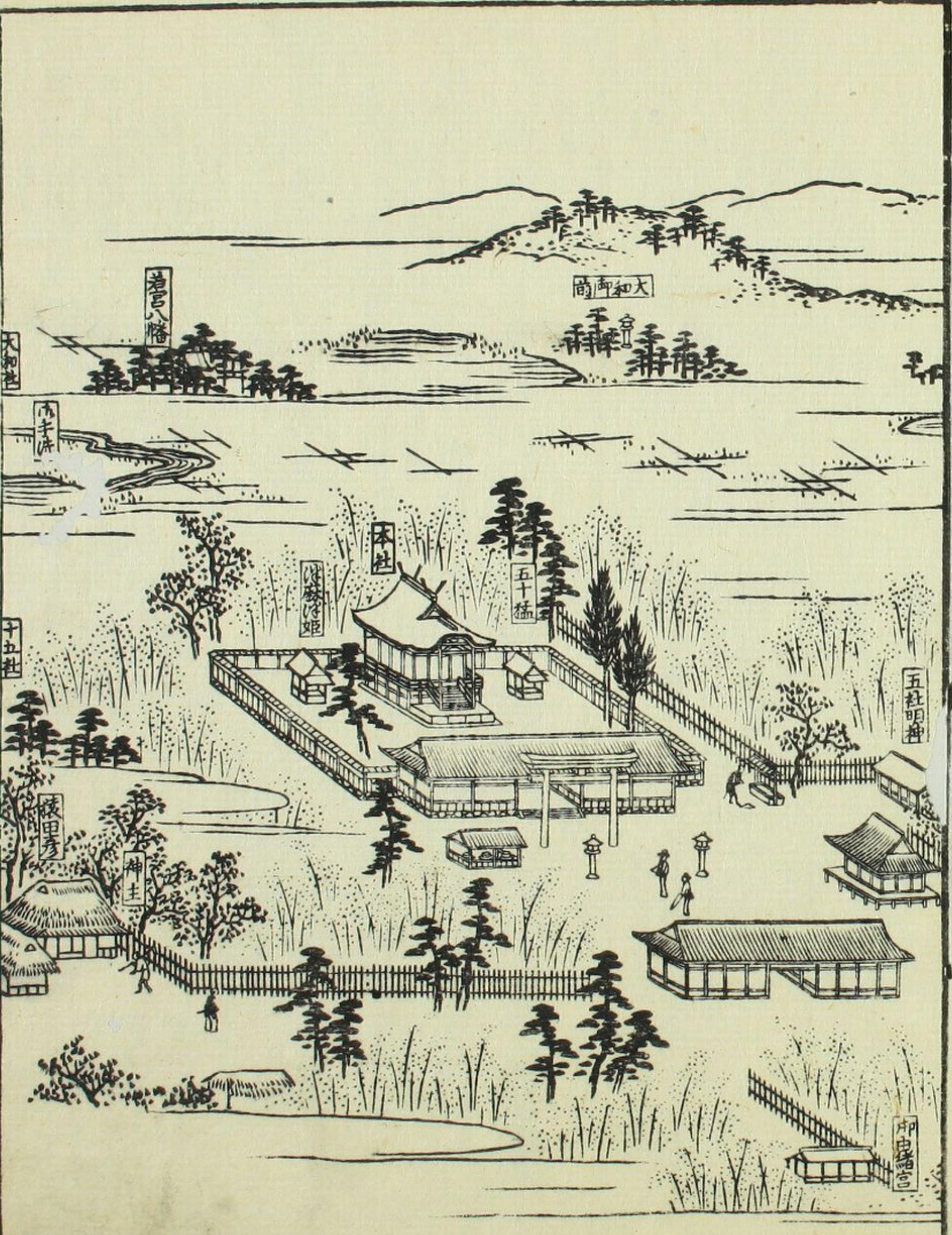
治元年神田十八丁社地五丁

二
三

不^ふ可^かの^の也^や、首^{くび}の^の火^ひ

卷之二

當初移家來到大慶



休足山永正寺

西本願寺之属

奉手阿弥陀堂

弘法大师の御堂

○御寺より根木

寺の御園の御

總社明神

田舎産田の産神

而て毎歲九月十八日を祀あり

主祭神はぬづらあべ

中宮は幣帛に持つて京師の祇園宮

御子をもておもてせし御儀

○御社の御家臣田氏は承和年中から

表の右大臣

四十二代連綿う其先武

十五社明神社

西村右島田氏

素盞嗚命

海添六月十三日五月十三日

仁五年造替の御事

御庫久保

十二代連綿

天皇

御

紀の川涉

西村右島田氏

素盞嗚命

海添二月十三日

仁五年造替の御事

御庫久保

十二代連綿

天皇

紀の川涉

西村右島田氏

素盞嗚命

海添二月十三日

仁五年造替の御事

御庫久保

十二代連綿

天皇

紀の川涉

西村右島田氏

素盞嗚命

海添二月十三日

仁五年造替の御事

御庫久保

十二代連綿

天皇

の巴瀬
大基原の巴瀬もありこの川の水上にそび張寒いとひどもさうなりひくとも地
の巴瀬
不渭満の志く秋の下駄とあるこのひどりをねりへてすこやかの便
中にはたゞ度きの工字はずして此中又御ありながれ水没れこれに四から五度のくよもさう
西うねぎのえりのきれをそそあらわすあらゆるがけの水をよ
きだとうおまえまやうりよ三つの水上に坐すよ吉野の水をよ
野川と呼んでやうホリエ海に入り早瀬ともともも枯渇
の養も水常に満く縮くたり古田是よりて間よりのその
千石あることあらば定より下の大河とりべて孔夫子曰くふ
かく称して又ぬよ水缺とりん閑鷗窓たら長瀬ようひ
游魚漫ぐたらは深よたのやう四付よたえる後土へとく
三ト一めわく深きひくよう後土と源へ春へ堰にうるそ
のわもびげに風ぬのまゆとゆひ袖と肩ふとどめ紅葉の
色よ露霜のは深とえくもども臂は流の絶情あらびと
つとあー○産湯。年魚。鮭。鰐。

支本

春々々々紀の川あらまゆうとせわくたむやうだん

平泰時

紀の川の涉

夜來風雨漲河
流歛渡津頭衆

扁舟試問仙槎

江上客南山幾

嶺花開不

紀蕃

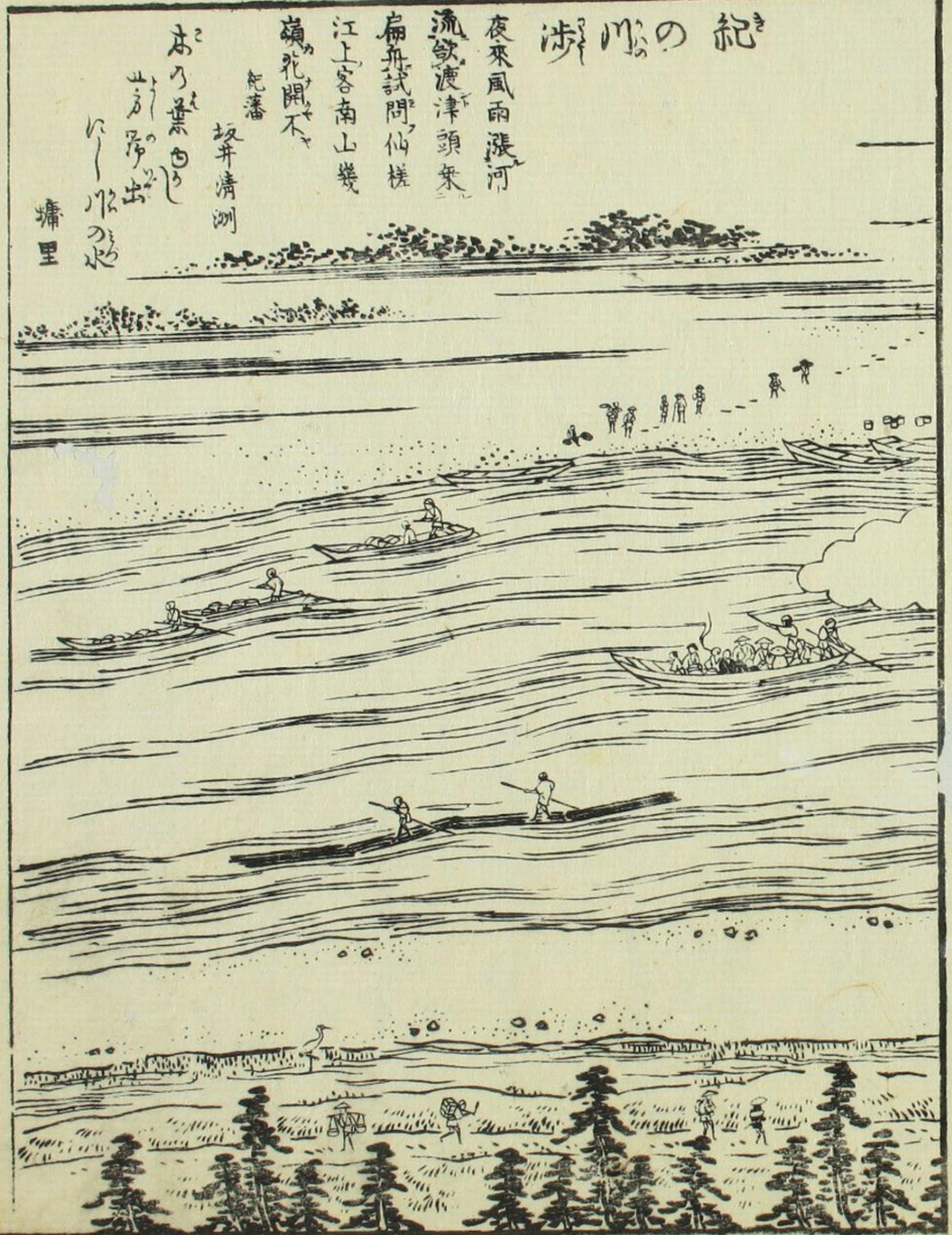
坂井清洲

あり葉白

山方号出

川口

塘里



支本

今朝もうへゆく御の水とあそきひ紀の川上を走る馬車

僧正

朝あさひ紀の川上を走る馬車がひのまみゆたわらうけと
法搭於船

雪舟集

水上千草のまきひ紀の川の浪のまかとあうなつうる那

東京大通

川をよしむのうりてはくとくとく

に

まゆく雨をもかとくるわく

に

あくとせ雨はこむる精長きの川上アあるとくとくとく

全

草根集

あくとせふ紀の川長うもすれ旗にてやまとひのまちをん

正徹

千首

きのくも

紀の川をの春のそととひのまくくと年う那

牡丹花

紀の川いくく歌もあり

たけうらめくわくわくや えうろ

其角

いと士の見うる中や

春の中

春日郊行渡紀川翠

菖蒲嶺

鳴鳥

雨歌

挿

春心跨馬歌

霞

追跡禽潭水

多田

露池

其角

田井

執行を夫教位中臣朝臣の末葉

栗柄村

大楠の桑の桑

其角

星頭明神社

一村の氏神

其角

八月十六日立祀あり

○神宮寺

寛永山内賀寺

奉立

意輪觀世音菩薩

三月

遂に田舎の脚

の御

御

御

御

御

八幡穴

半身

坐

坐

坐

坐

八幡穴

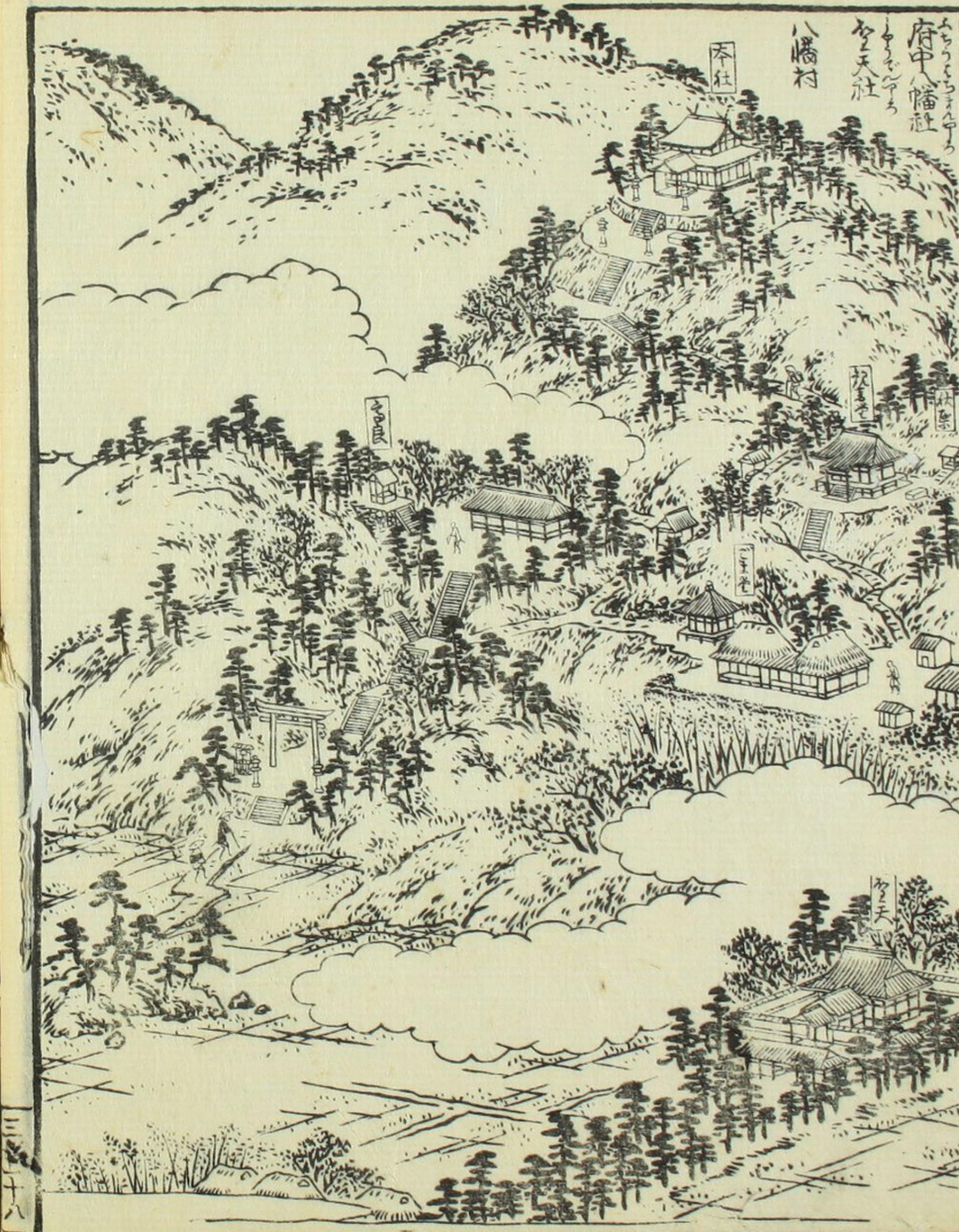
半身

坐

坐

坐

坐



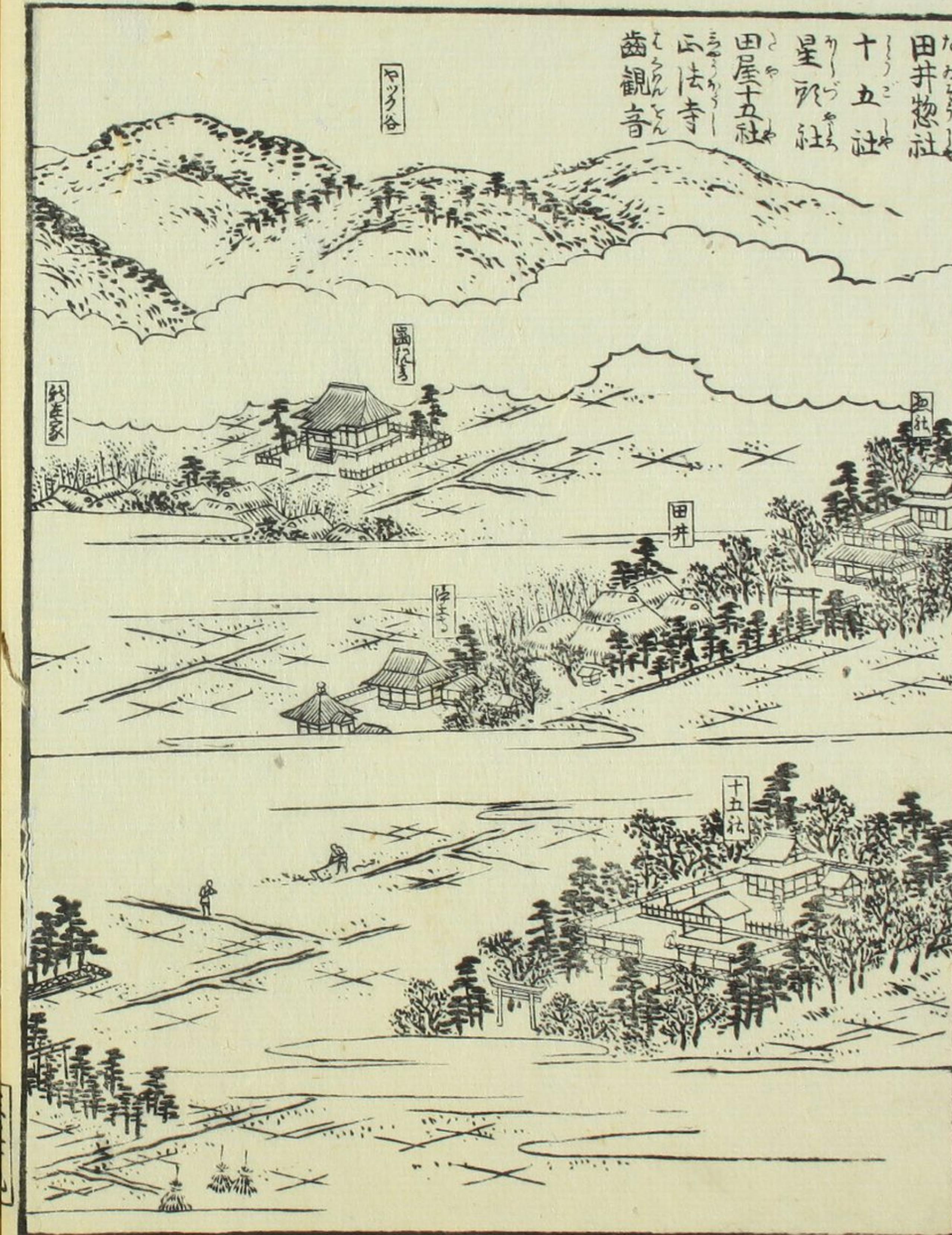
金くらに佐宿に住く東方の白あんとまつはとひ御邊中うち一條の光明赤くとして
すむら麻年の乾とて、野村の山下の脚民もよび拂いてもどめては城のまう端靈
あらりありて、山もうかしてかくと郡廳又計へてうべ刺吏則地名をとて巫覡といを彼所
あらり是れあやしもよ其地峻きとて墓址とうよ參りてだり歸トりゆく
山ありもとねねとたま一便益のく倉拍板紙毛にて盤古のくともその内平成のところ
あらりをほの庄地へうそく、平成にて神邊のくと、龜とくあらりをきけぢよ
居候はる御邊と奴やまう頃巣のれをつて、下よ青の巖下に、鷲う泉涌生
石清の神跡考明く、人渴候のれりひはう今又我先の御わづげう希トうて、巖の里と、
の里と、みきうまと、發生水ある。今之川村の下流これさうと
は村の南山のまうと、みきうと、うらきうと
すもとみゆり
武内宿祢

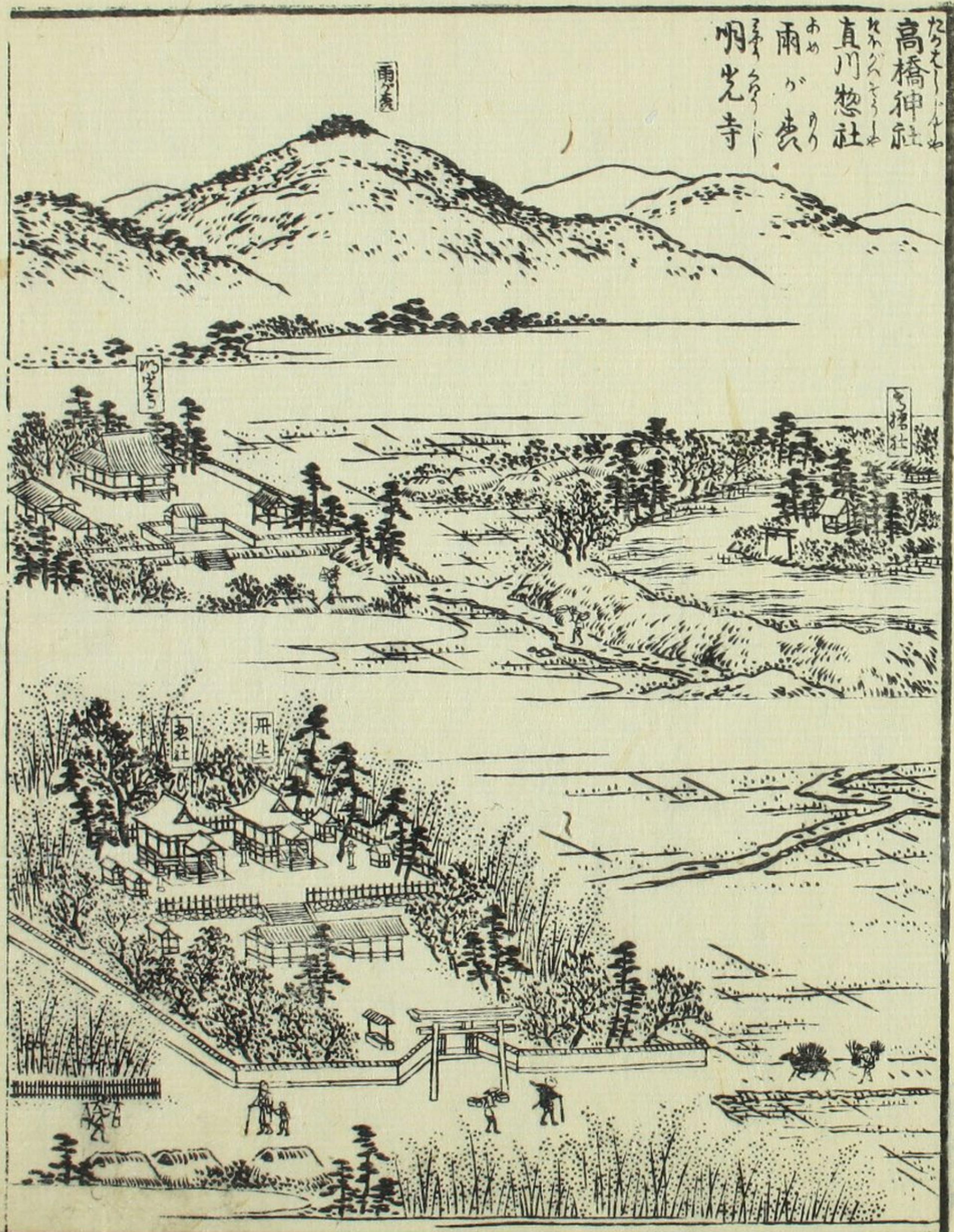
圓上寺旧址
右記

右

十五社
梅松山三昧寺

田屋村たやむらより
毎歲九月十七日
御神体みことを祭まつる
一村の産神うぶあり
名前なまえは五嶽ごがく鳥居とりい
卓多たくた十一面觀世音菩薩かんぜいん
神像じんぞう長ながめ
庄重川村じょうじょうより
御神体みことを奉まつる
長年中ながと年年ねんねん安樂あんらくと云





田屋助左主散位

名称未葉
のやくみや

曰く農家にあり今ハ改名モテ本林友左衛と云列連署の
下にて連綿たる於委モ粟植村が塙丸の系に居る
事日令ハ毎家十月ナ一日をル

又云高橋連二野
この二野の内、ある
やまの山峯天明神

とゆふつてあひ
あれまくすり成乃

丹生神社

地にさきくさむ
聲のうほもあらんとまうすへゆゑをちよつてうりの
まへで両候とさればう立難姐よし僧峴山張益鼓山戴帽のよき
にわよあつ一村の起と御みそて毎歲九月十四日ひにうち犯あり社あよふ場ばあうそ東と西陽と
りぞ其も一の神主さどみかうりて御みそおのまもあくそ事こと居あらざる

昭陽山明光寺

總社を薫田と云ふもの潛を走りて、かゝたの總社を
と齊。にまつねるもよべ。總社のゆべ田中村のやせ川作の東をもよべ。
浮土家西山流
桃取也おも屬け
已村あり奉るら弥陀佛 作伴うだ
年少光秀上人の昇基きりはくに真尼くづく豆娘夷のあらわしき

たかせーじよ
高橋神社
たかくわうじよ
直川惣社

偏人

勝山淨水寺

本多阿弥陀寺

大福山奉惠寺
見堂　一王門　鐘樓　閑山
千手千眼の
千手千眼の

○奉堂千手觀

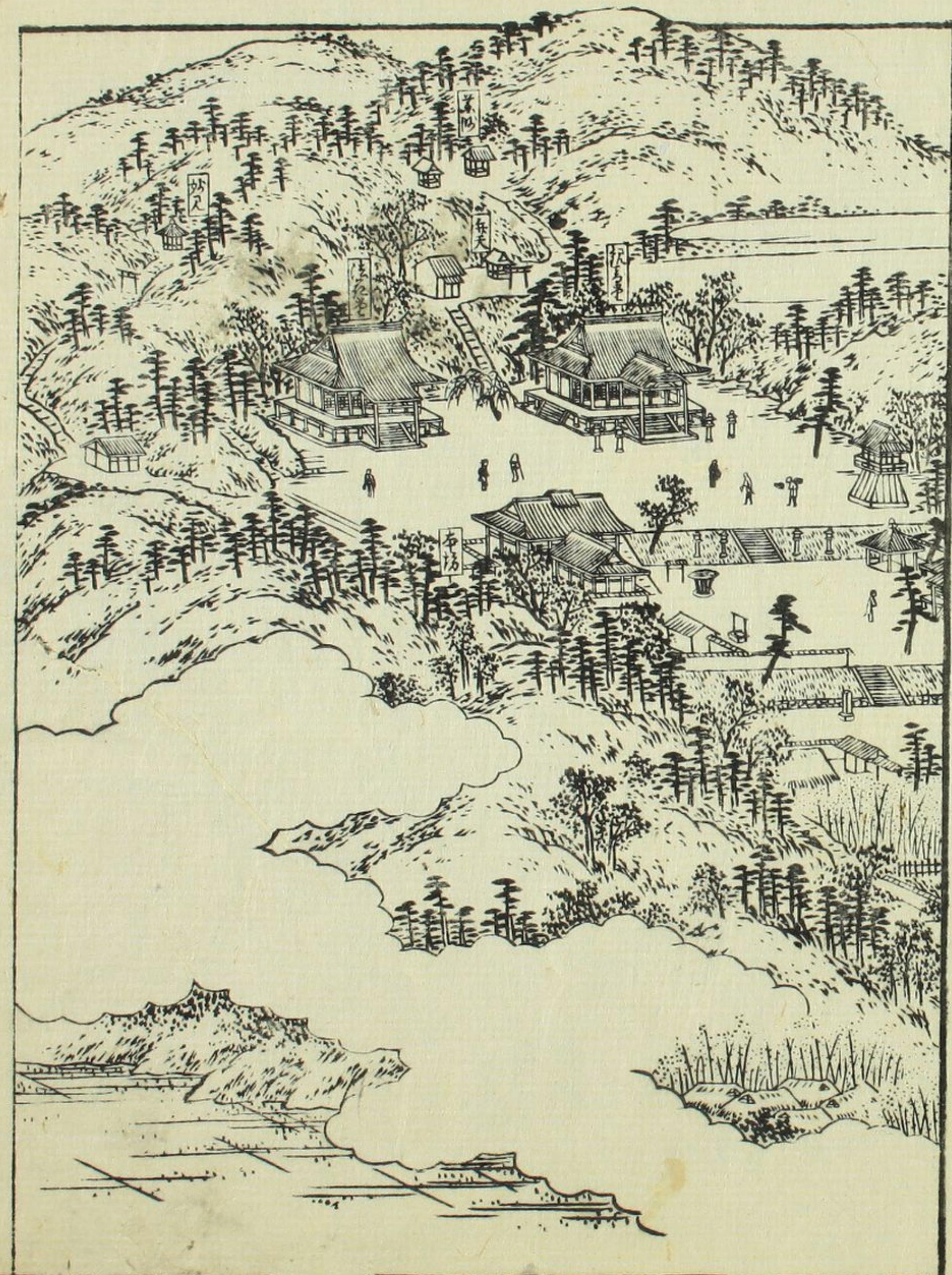
○經堂 開山堂の
二區、總十區あり、
妻共四區ある。

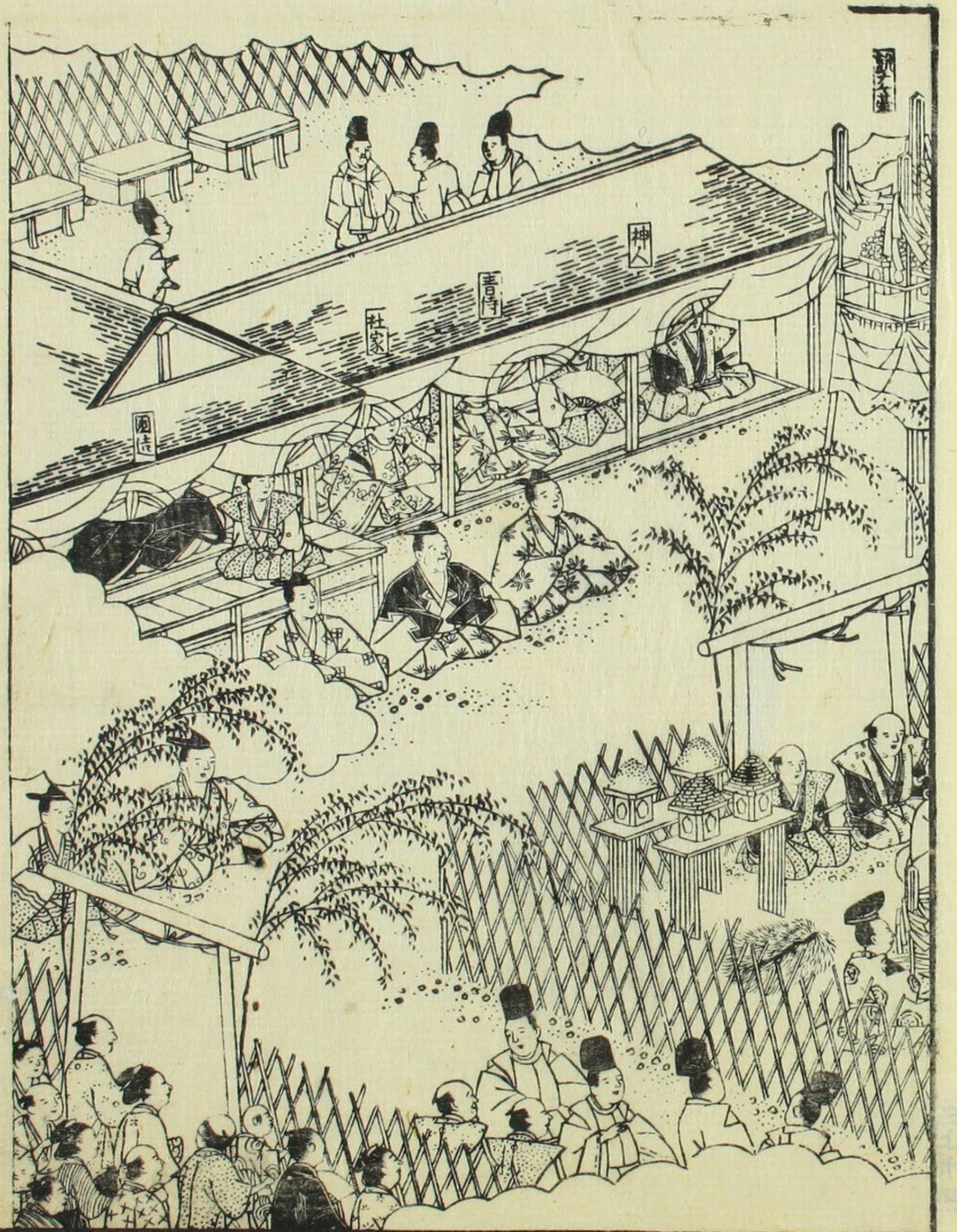
○藥師堂

はな塞の開基有
る。奉堂より
も頗るよ。

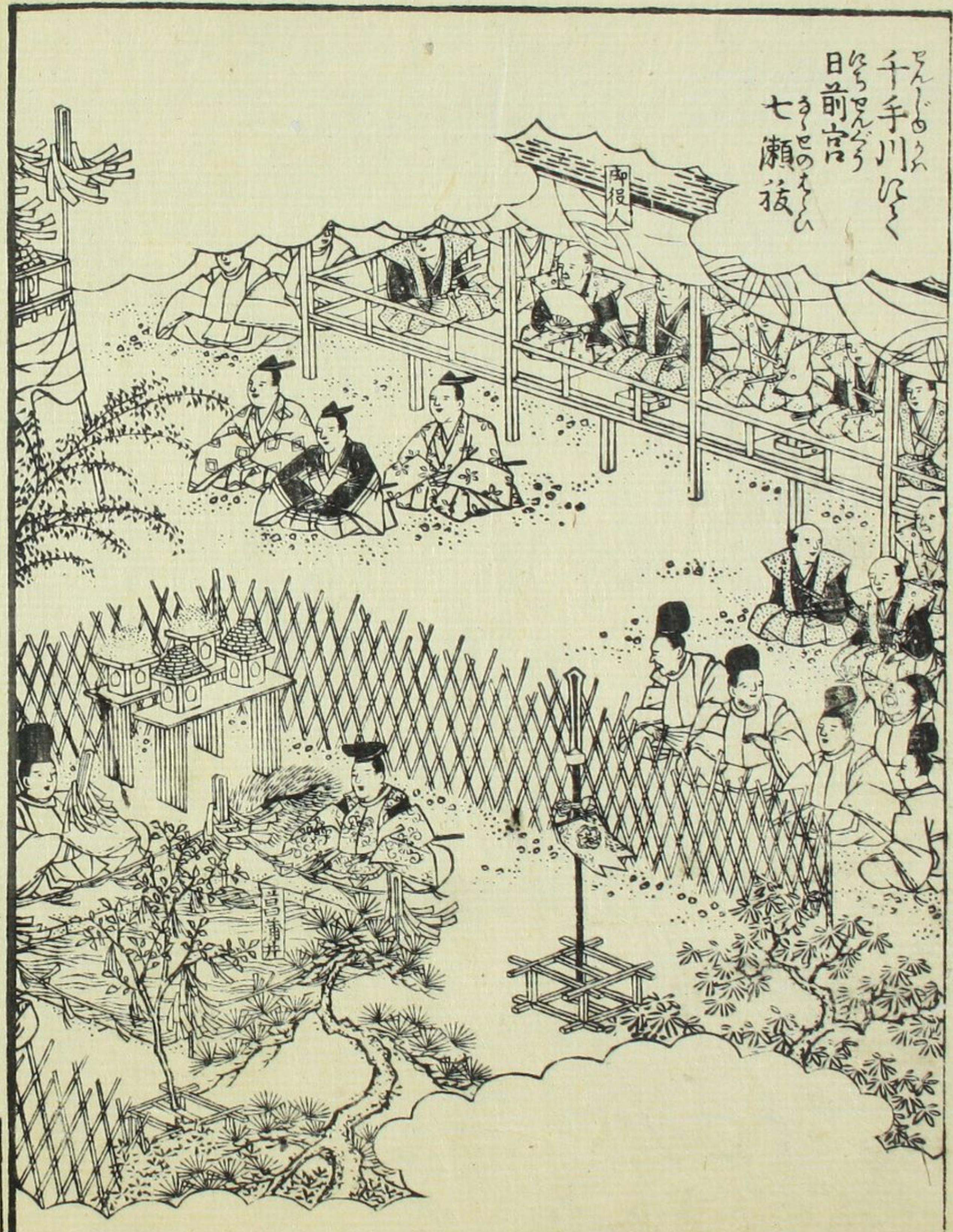
世音立像にて張
三尺をす役の
○一折權現社
執事の役
此より上へ中血闇
○妙
小き一町にあり
貞言秘密の裏
四直とくとくの
後後は塞有

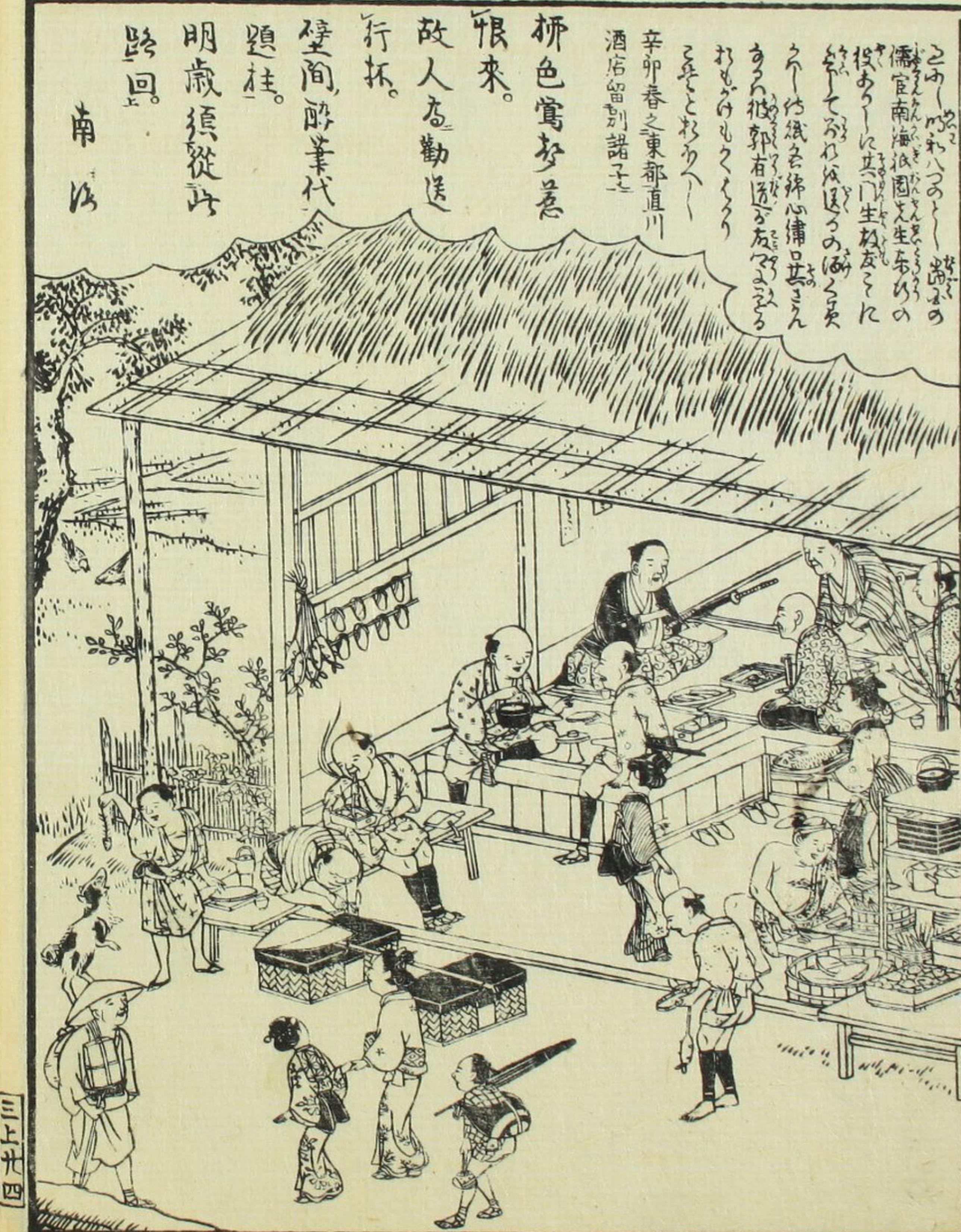
一刀二柄の法化にて持丈植武天皇御崇敬のモニ像あれば近暦二
十三年夏五月勅使をあて御漢経作より始草創の地へ
是よりとふ入来九十餘町少りて辨天の窟高城山中を法華堂
之に記して正和十二年もあわくと號聲部の窟高城山中を修む也
尊よりて寺を千手と號已う古本七丈壹尺の内半二丈集童
師子相傳在高城山中多す其は同州由良の奥圓寺の因祖法燈圓師
感得のを以て法弟を上人宿人方徵の夢識にとて空巣二字
也源家より上人号を承りと云稀有御事ふと聞きよ墓あり
神永年二月十八日に入寂に當ふよ墓白玉塚
移して尊宗の碑剝さくした僧坊都三十有二舍諸堂壇とあく
て巍然けいぜん也ううづくが天心の共少ふ離はく一時小灰燼こじり
室ふ慶長年间のゆうとよ生ひの隱士平塚誠中守造久
賀ちる人夢想の靈験ありて再興の檀越つげもあり資財と施
て諸堂を造立一經また年中日蓮一家の高潔日忠士





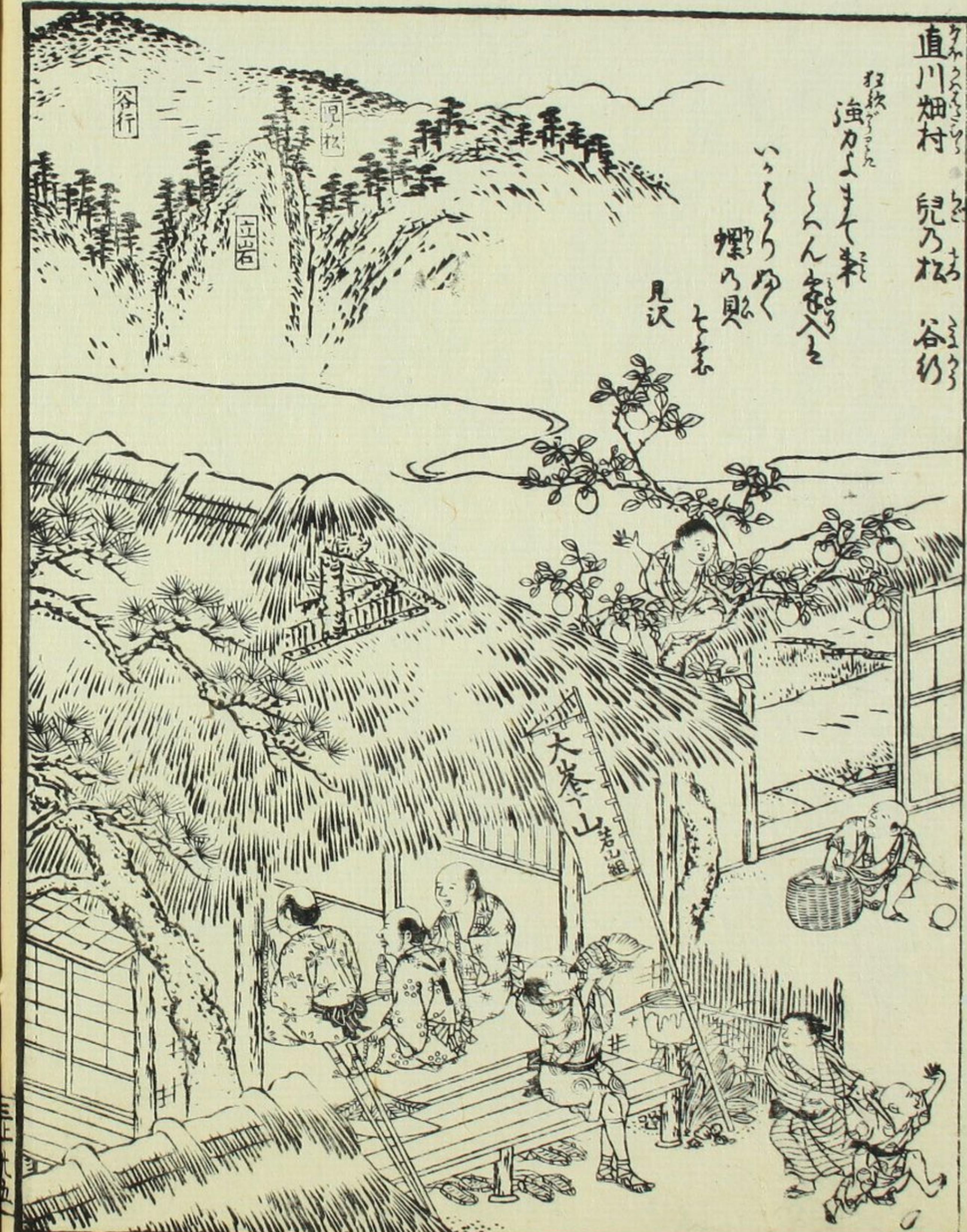
三五九





道の終りあゝ燒巖巒嵯峨とて登攀頗る若狭う最高頂小
豆山古松翁尉たる中に児の松とりあづれ則名紹と

今謡曲へ作らる



直川助とま散位紀朝臣の末葉
彼翁者母ふ不居
直川細井ようじ
二十世墓の碑文

藏王権現社
例文
毎年六月十二日九月十四日十一月十六日
同村より一村の生徒作成
同村より

卷之三
八王守社

社
例々毎年六月十二日九月十一日ねまわし
くわん

伊豆の神社

山路莊

奉國神名也
比古神社同也

天香山命也。○南紀神
伊也。比古天香山命。
五十種。其之。奈國也。天香山
命也。皇后三韓。ト。帝。亂。車。

一言上
作く射矢

直あらゆる矢を射そなましに其方剣け地止しへ
止はばんがくと齊犯そなましに

南嶽山大同

頭密の法を修練す
にあらへん
す法華院
比叡山に屬す

本居宣長著
経済社会の研究

日吉山王権現社

と
安徳
徳
同

山本の小屋

鳥羽院

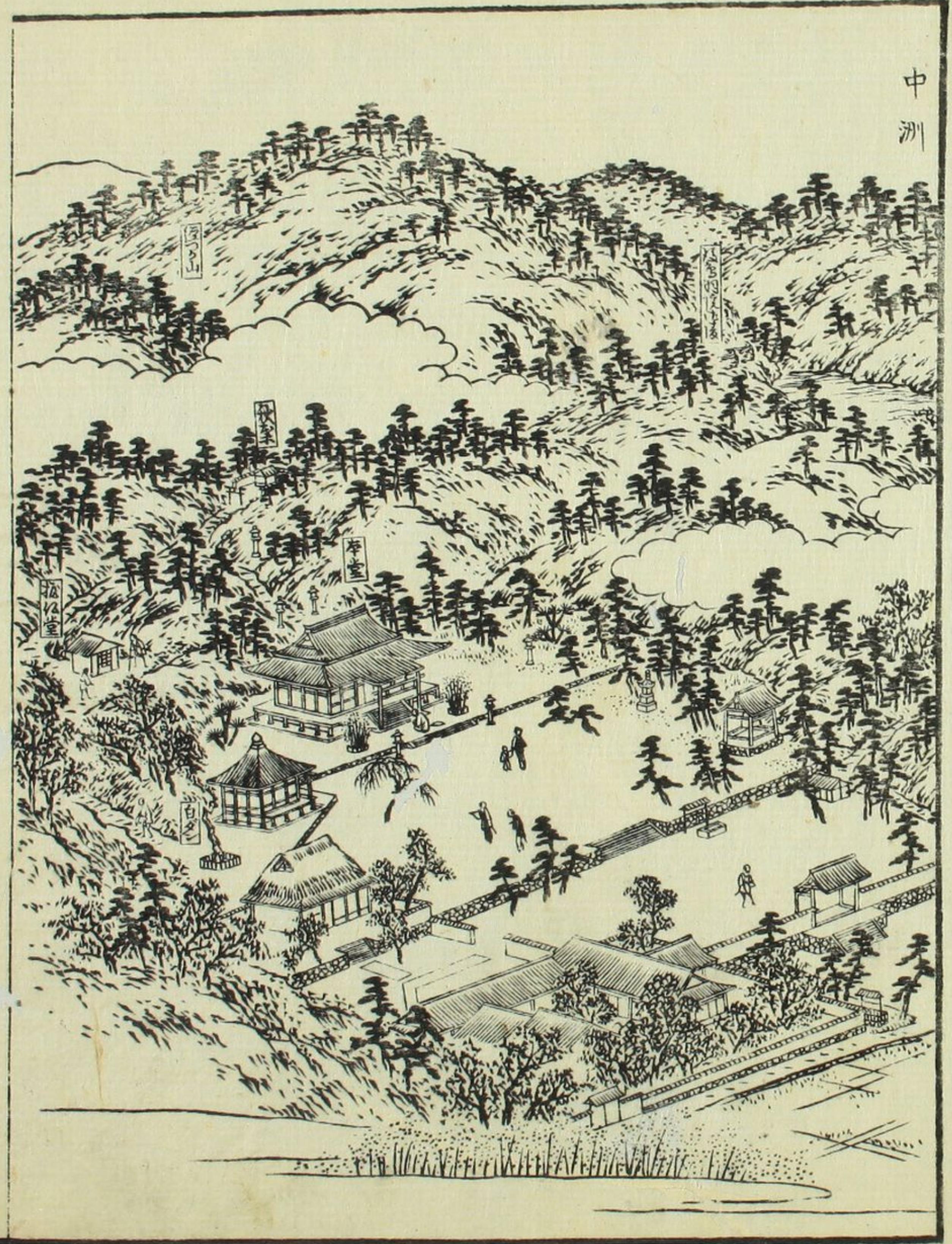
霞
山の半眼すまう

支那山川
地圖

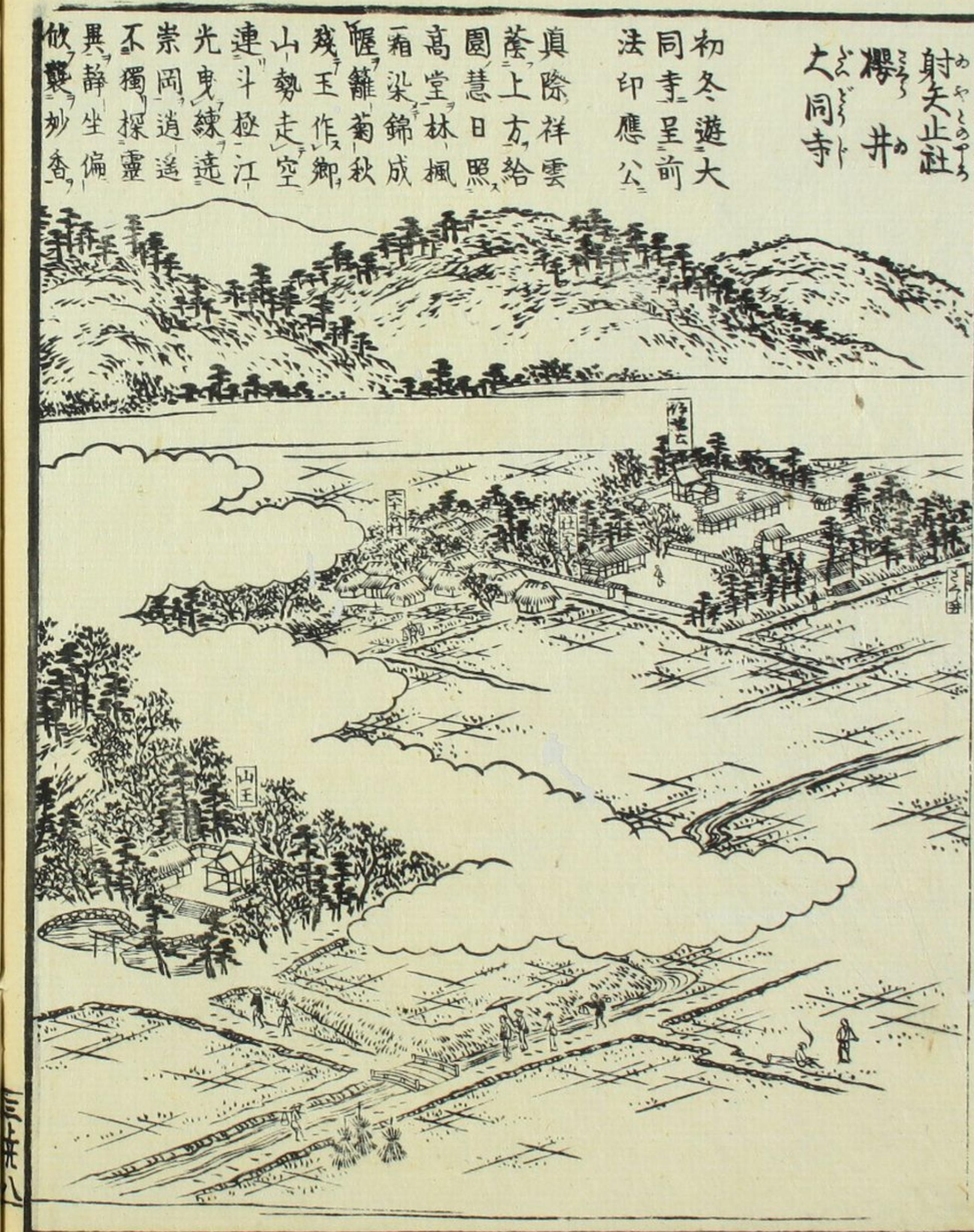
（皇五代至城天皇仰慕建立の御願よりつて大正年中
御勅詔奉るをひよしと相あらわす事多也）

谷のやまう山岳をらもむに里巻遙よほく峯本山あく塗の
ね風観くとて毎明の睡をもぬ一洞水深くとて煩惱の熱と
洗つう大師とよろこむ也ふひ是必し神仙の憑栖仙墳の靈宮
なづべどもあた興よ天奏を經く一宇とま創一觀赤梅檀
きりて送玉告誓のそ像と形跡一色と安じて根本中堂少く
帝廟感應うだかれて南嚮山大日寺法華院の勅号とく
たまへもく其は不唐院の圓仁阿闍梨大師の遺跡とちくひく
當山ゆゑ入もく一佛圓滿よ造立一法華寺をたて大防真跡
の妙曲と納め二昧の妙行あること多く多宝塔よ四邊の寶篋
伶倫の樂を奏一六楹の華幡殊人の袖躰ぐせうもつて是よ
絶く燕え大陸幽山よおもく如法經伝修一もく釋迦もく
普賢菩薩のそ像と自刻一別院よりを承安一篠株と紫雲
六門の遷移ふニ會の曉をけ常経堂よ跡院尊像ニ昧の念

佛たゆるとあ一萬神の社ハ伽藍の破壊をやうり山王の約ハ
令法久候とわひあく五室の大塔よ大日堂玉仏堂して孫仰の
秘法と候一一切塗の輪藏入へ現身の告趣と浩大一む妙見
堂矣天堂を初と左方の峯にニ宗真言禪律の二院
起立一右方の峯又自ら書寫の法界と收め經場山山名付
たを更小寐光都矣安養の二院近達く奥の院と名を
うだ嵯峨涼水の兩帝もひく御帰依の歴々深く弘仁
がくび天長の寺界ともい奉ふの二院と表してはいた二院
増立一各根牟法界常行の二院と没れく山巍々たる内閣
臺とすく右登一美疊口一慈嚴と都鄙の清人被とう
ね緇素渴作のあらさぬへ靈氣の一會密茲とて被ホ放セ
ごくかともももくからて家廟あまくじにて後鳥羽院の
御宇然野清業のおり圓輿をめぐりて堂塔再興の



中
別



射矢止社

地天嚴靈
平安然山
日月一珠
日月散會



義直性記

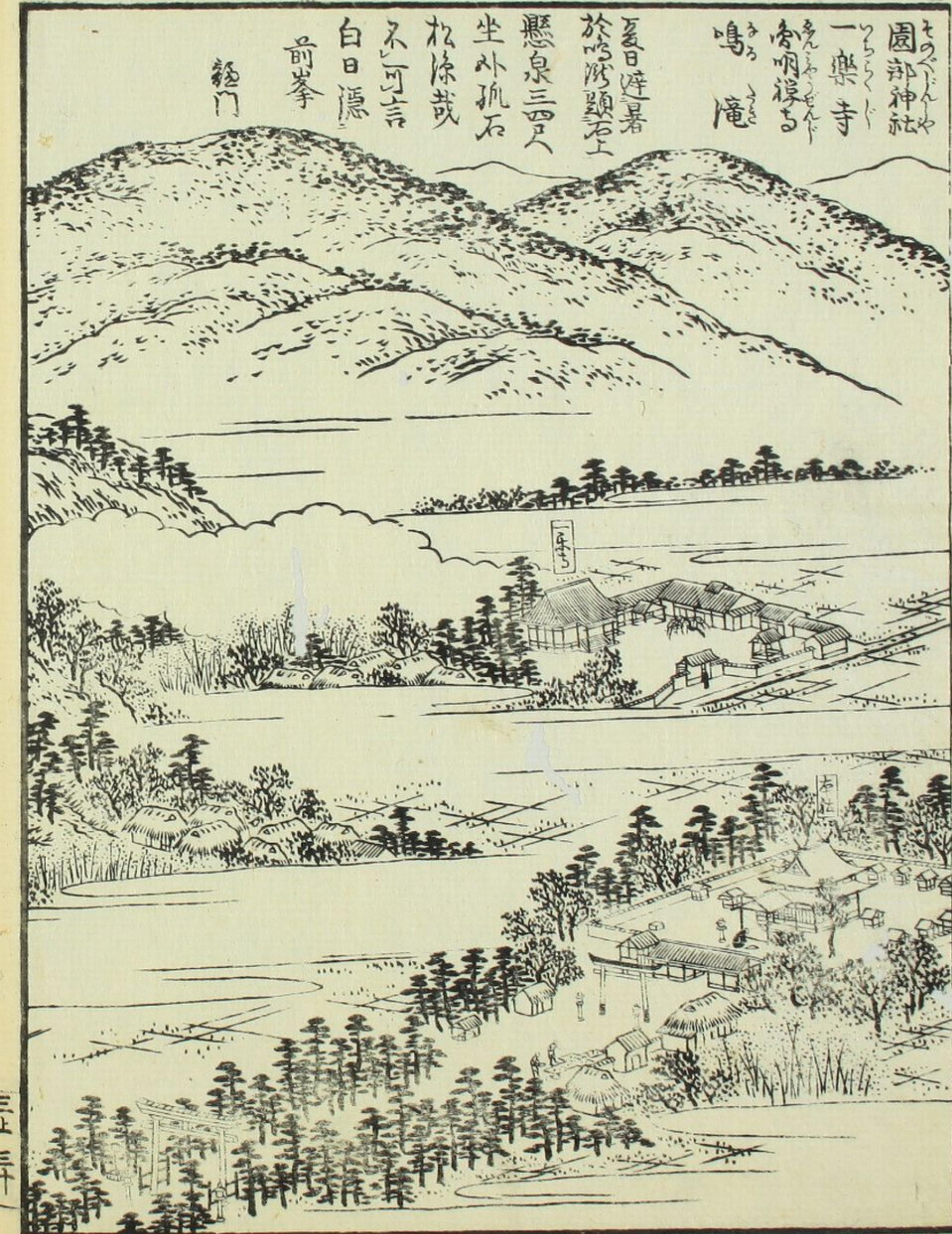
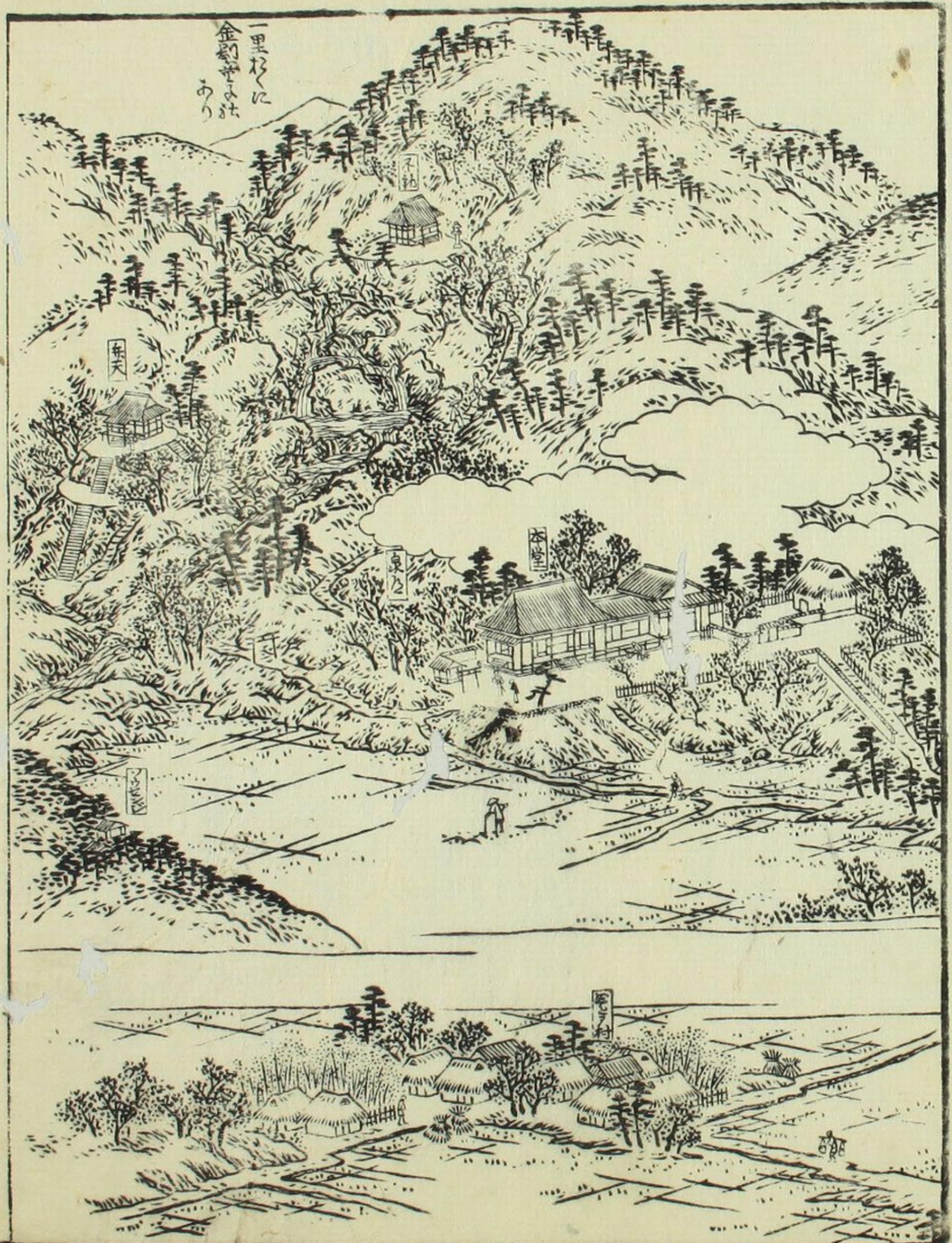
佐藤公義
佐藤公義
佐藤公義
佐藤公義
佐藤公義
佐藤公義
佐藤公義
佐藤公義
佐藤公義
佐藤公義

義直性記

卷之三



勅と下へたまひ西山より陵を葬已て一一世の御祈願
奉りけりとまど歴代勅願所として止觀の室より一念三千の覺
矣不く後り兩幼の麻より二密か持の智月長くゆかれた
万葉不退軒の靈場たりとよと云ひの一矩に龜也とあらし
と雖じても猶御うあらまども樂師の奉事より中年



終はか昔二年壬申歳七月十四日刊年九十七にして卒に法
謚と字成院宗遠日理居士とつ先生ムキより村里にうほる
との記あり聊先生の二姐と仰みたとびつた記

佐野隱山先生墓

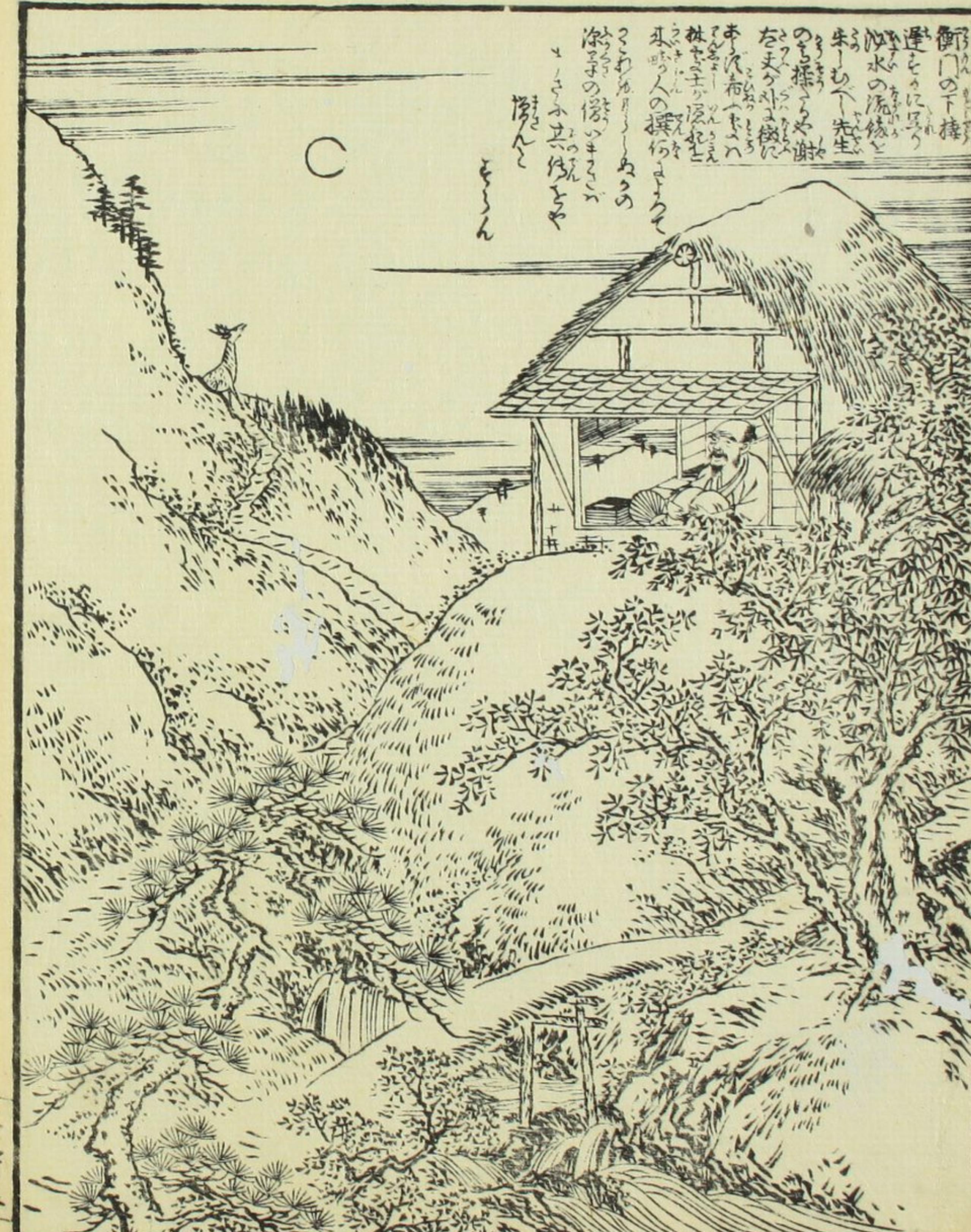
あらそとちのじよふとくはわのとこうふのあらそ
おやふうまく祭月あらそ
んごとくいとせせむねり 秋乃夜の月
かづくあれたふくまくはく書にあらそ
あらそ

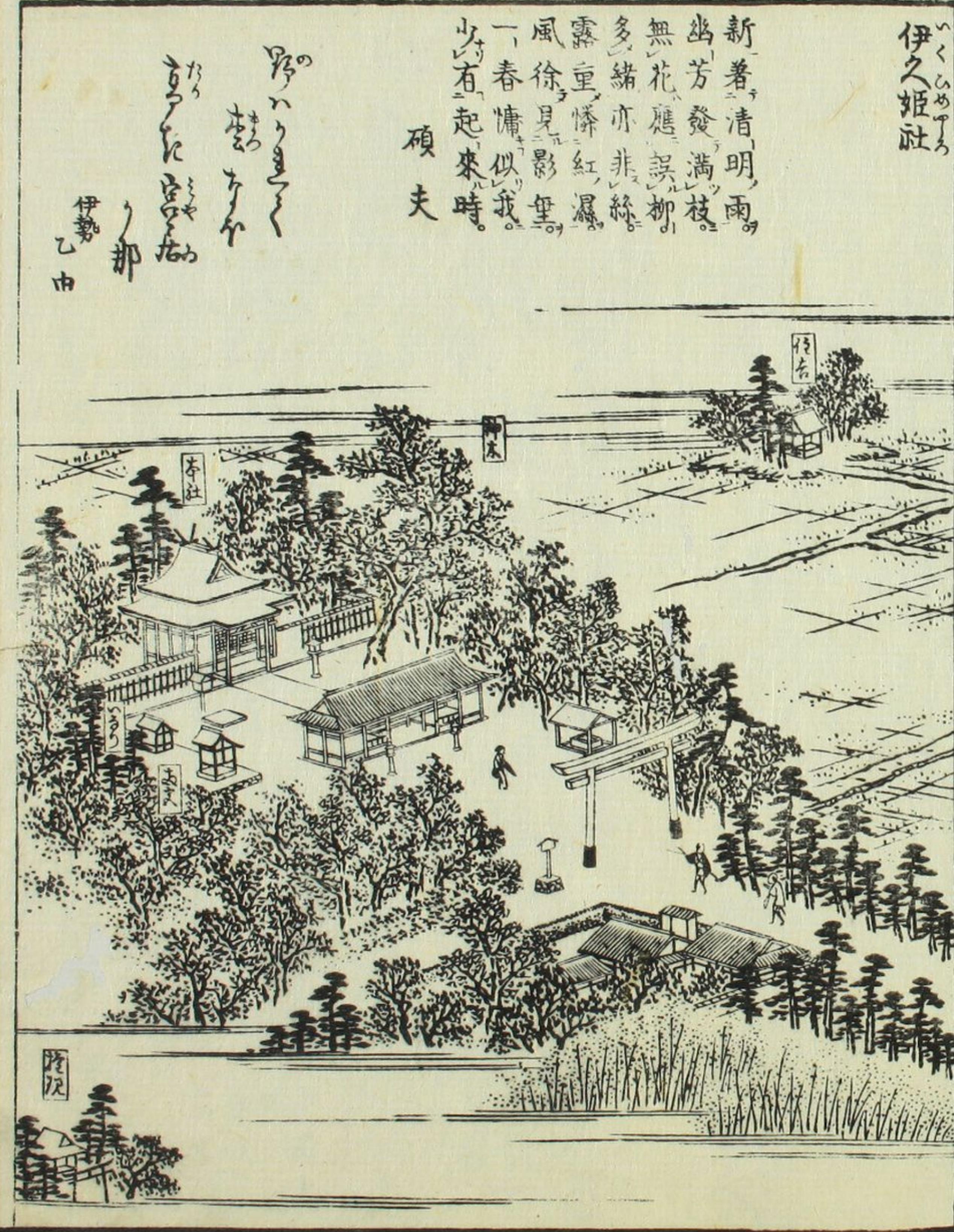
延享辰八月記之

小
老翁九十二歲

而澹已纓憂馳矯慙魏僕將今竭幻農沼。無如前昇上想之闕抑七奔者之咎。首甸留興熙然山車徒朝而亦十之鐘。態至水賓之隱。俯至使絕居學其官徒布骨秋于林之以山南。仰杖令塵悲跡徑俗道搭偶此木蓋爲東其處宇策給偃十莊固之其之清從鴻漢其帶趾最富林朱仰載周似謂名士癯石意間疊寺大廻草之丘嘗一日所其非以地面和其禽嶂觀嶺者。堂間籍不室未謂心財于余有君心鳥廻巢周爲言時優草給視嘗并則陰與嘗煥過密處密處葛游而後其邇與非者觀霞北高鹿賓其敷之林想無左聲与也。右古氣山尚之主腹百嶺壑有僧石色其巖小哉今與之之觀顧無里葛之感石因足置居室利隱之下土古門往劍之中。昂朱書來而川而其者共獲隱之人無脊爲竟。特嘗數嘗寫觀已高衆詔覩平町號之箇嶺與筆不參蹕之接其而矣津隱其謂與蓋頭尾低造命飽茶朝豈跡餘釣有致山間取雲亦森立南物懷茄香市逐市擴榮其使居者之霧奇以紀海者客蔬蓬志政朝世利念人土吾無相山然非相至飲硯未治夷煢者未心者求禁嵐云瀛須終不泉嘗之齊俗是嘗醉處之用爾。瀛泉始拒終然半地巢檄以不而士久之又余以尉空者去歲而替哉由慢林在懸矣不復常為和。

支本
吟風の音より聲のうちひたへゆのよもじとしてけづらわを辛大武を
六右
なる風の音向のゆとりめに春のもう風秋半に吹き
かだえてある風の吟風のたまそ人所あらまひと
右詠歌ふまくよ 黑 腕
益 名
富 天
か 雪





伊之姫社

新著清明日
幽芳發滿枝
無花應誤柳
多繡亦非絲
露重憐紅濕
風徐見影垂
一春慵似我
少有起來時

碩夫

其川謂鶴遊
遠角暴龍者鳴
亦之爲者鳴
吾亦同龍在龍
紀清故府詩
之幽名城序

勝寂其北
境不斯地一
也可丘里
具壑蓋
狀窈葛
去穴嶺
都松之
檜區別
此齋茂云
其遙有北
而大中本
出悲有惟
塵之暴恭
如閻國
是郁俗

海部邦

そよぎの五人余れおどり人嘗く研棒銀器と人一寺

觀と人も

群芳譜曰。崑山縣志云。龍共猗。汴人殿中侍御史。扈從高宗南渡。道經崑山。真義折銀杏一株。插地祝曰。若此枝得活。吾於是顆相傳為其子孫嗣世之數。時人異之。稱為龔遇仙樹。子孫遂為崑山人。云市小河村

任
七
賣
神
社
市小河村
祀
る
神
詳
か
ば
延祐式神名帳
此從四位上伊久忠壽社○奉神
一村の生太神にて例を毎歲九月廿三日にて生太平宝字八
年里城食水の付原田圓ひまとして巡討ハシマツ崑山の後神告
によつて此地も賽幣セイヒとく美う恒例タマハシマツあるタマハシマツに
か
頃
神
社
猪岩村
一村の産神タマハシマツにて例を毎歲九月廿二日

内村あり。内又篠原古村あり。幹年をくらべて二國に理
せの右側カタシドリ内山ナカヤマ又本ヒラ人ヒトあり。神社カミノミコト立堂の守護ムカヒてねをテネてセの
家の氏カミノミコトとあして藤木フジキと呼んでハスヘ。

崔水向熟來依入正是朱明節檀場別麗辰。
休言間色賀可貴殿餘春况復長松上拖根得所親垂縷欲

